八十八膳献穀会　会報

結 yui　第16号

樹木の時間　木田　都城子

生活の近くにある巨樹・古木というと、神社の木々の姿が浮かんできます。御神木になっている樹木、鎮守の森の中で静かに息づいている樹木。その下に立って見上げてみると、長い時間を経てきた風格と迫力に圧倒されそうになります。

そういった樹木の診断・治療を行う機会もありますが、処置を必要とする樹木は老木といわれるものが多いので、私よりずっと年配の木々です。畏怖の念、という言葉の通り。私が作業をしてもいいものか、失礼に当たらないか、と感じてしまいます。作業に入るときには手を合わせ、御神酒を供え安全とともに触れることも許していただけるようにお願いすることにしています。

堅苦しいものではなく、余所のお宅を訪問するときに、「おじゃまします」という気持ちと同じかもしれません。現状を改善するための作業と人は思っていても樹木はどう感じるのか。話してはくれないので気になります。気になるから「おじゃまします」のごあいさつ。いきなり触れるのは失礼な気がしてならないのです。

先日、お子さん達を森へ案内する機会がありました。森にはいるときに「おじゃまします」とあいさつをして木々や生き物を驚かせないよう接して下さいとお願いしてみました。森の生き物の生活圏に入る私たちは、森にしてみれば来訪者。元々のそこで生活をしている生き物への「おじゃまします」。虫が出てくると、私たちは驚きますが虫にしてみれば、出てきたときに人がいるのにも驚くのではないでしょうか。

静かに進んでいくと聞こえてくる木々のざわめき、虫の羽音、全身で感じるすがすがしい空気。これと似た場所がどこかにある、と考えたときに浮かんできたのが神社でした。

子供の頃にも感じていた畏怖の念。その当時、この言葉はわかりませんでしたが、いま感じているものと同じ気持ちです。そんなことからでしょうか。神社と森は私にとってなつかしさを感じる場所です。積み重ねてきた時間に対しての敬意。

人には人の、自然には自然の領域があり時間の流れがあります。それぞれ過ごしてきた時間が積み重なり今があります。自分の過ごした時間を振り返ってみるきっかけの場所。神社の樹木を眺めながらそんな時間を過ごしてみると、すがすがしい気持ちになってくるのではないでしょうか。

昔々から人の心の拠となってきた神社の樹木は地域ごとに特色があります。鎮守の森、神社の樹木として守られてきた木々。これから先に繋いでいきたい樹木、そして想いです。

（　きだ　ときこ　　樹木医　）

年間行事

4月	総　会	10月	芋煮会
5月	田打祭	11月	飯野八幡宮新嘗祭
5月	御田植祭（会報発行）	1月	農立神事
8月	注連縄奉製勉強会	2月	飯野八幡宮祈年祭
9月 15日	飯野八幡宮八十八膳献饌		
10月	抜穂祭（会報発行）		研修旅行

八十八膳献穀会　会員募集

現在　奉耕会員　二十七名
　　賛助会員　五十九名
　　特別会員　五　名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は、古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には餅米を作り畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解して、更に受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解いただき、多くの皆様がご入会くださいますようお願い申し上げます。

原稿募集のお願い

会報「結」は皆様のご寄稿により形成しています。
発行16回を迎え、今後も「結の輪」を広めるべく、ぜひ奮ってご参加ください。
内容・形式などは下記宛てにご連絡ください。

結 yui　No.16

発行日　平成19年10月13日
発行所　八十八膳献穀会
〒970-8026
福島県いわき市平字八幡小路84
飯野八幡宮　社務所内
TEL　0246-21-2444
飯野八幡宮web
（「結」既刊分はこちらへ）
http://www.noteplan.net/8man/
発行責任者　飯野　光世

農耕文化におけるハレ　飯野　光世

今日も神社には嬉しそうに手を引かれ、晴れ着で装った、可愛らしい七五三詣のお参りがありました。子供は七つまでは神のうちともいい、健やかに成長した晴れ姿をご神前に報告し、これからの無事な成長のご加護をお祈りします。さて、「晴れ着」のいわれについて少し考えてみたいと思います。

「ハレ」に対する言葉に「ケ」という言葉があります。今はあまり使われなくなった言葉ですが元は食物を表す言葉です。朝餉、夕餉もまた、朝食、夕食を意味し、一毛作、二毛作もまた稲作に関係する言葉です。また、褻（ケ）という語には日常的なことという意であり、褻着は普段着をいう意味になります。

「ハレ」は「ケ」に対し、非日常的なことを意味し、晴れ姿、晴れ着、晴れ舞台、晴れの日（入学式、卒業式、結婚式）…など、ハレとは特別な日のことをいいます。

日常であるケの状態が枯れると、ケガレとなります。このケガレも、ハレと同様かつ相対する意味で、非日常的な状態でもあります。非日常的な状態から日常的であるケの状態に戻るために、ハレを迎えるための手段である「祓い」をすることになります。

また、ハレを迎えるときにケガレがあれば、ハレを迎えることが出来なくなります。すなわち日常的である「ケ」を挟んで、両端に非日常的である「ハレ」と「ケガレ」が存在するのです。ケガレは日常的な状態にハレがあるのです。

神主は祭礼を迎えるにあたって、潔斎というお浄めをします。これは外清浄といいます。また、参籠という別火をもって、おこもりします。これは、内清浄といって心の潔斎です。飯野八幡宮では「ハレ」の例祭を迎えるにあたり、九月十三日の潮垢離のあとは祭礼が済む十五日まで、おこもりをする慣わしが今でも続いております。

祭典の際には必ず「祓い」があります。「ケガレ」を祓い「ハレ」の祭礼に参列、奉仕することができます。「祓い」には「風」「水」「火」をもって行います。お参りのとき左右左と神主が大麻でお祓いすることは「風」の祓いです。手水で手や口を漱ぐことや禊は、「水」による祓いです。護摩祈祷や火打石による切火は「火」の祓いです。それぞれ風や水、火の霊威をもって「ケガレ」を祓うことによるものです。

稲作は、年年歳歳同じことを繰り返します。先人たちはこの日常的な「ケ」の生活の中に、村祭りや節句行事などの「ハレ」の日を設けて、日常的な「ケ」を非日常的な「ハレ」に織り交ぜて、メリハリのある生活を送っていたと思われます。

現代でも少し装って、家の外に出て散策や食事などすることにより、日常生活にメリハリがつき、心に潤いがもたらされます。四季折々の移り変わりとともに、このような節目、節気を大切にしたいものです。

（いいの　みつよ　飯野八幡宮　宮司）

鍬鎌の文　小野　一雄

先日、私のところにデジカメで撮影した数点の書軸の画像が持ち込まれた。そして、その解読を依頼された。依頼者の亡くなった父が所持していたもので、家の片付けの際に見つけたという。まず何が書かれているかを知り、内容によっては今後適切な方法を考えたいというのである。その話を聞いた私はさっそくそれぞれを解読し、さらに歴史的な意義をコメントした文を添えて依頼者の希望に応えた。

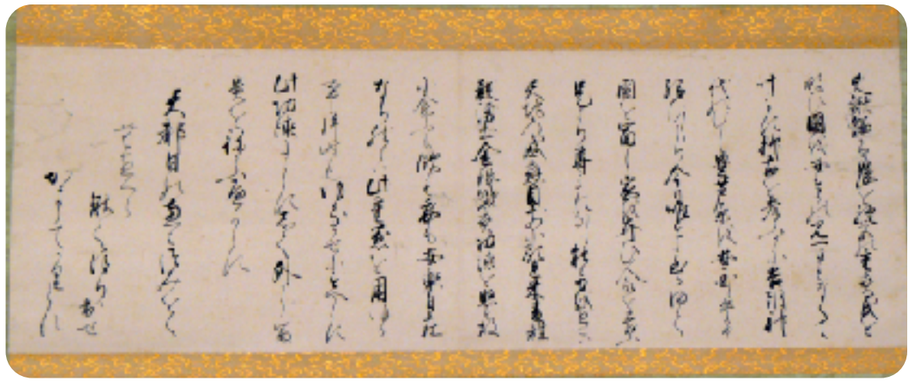
そのなかの一点に題名も作者の名も記されていない文章があった。鍬と鎌は農を営むためには重要なこと、そしてその功徳の広大なことを説いたものである。この文章にいささか興味を感じた私は、少し探索してみたい気になった。

流麗な筆遣いのこの軸は、おそらく文章の作者の手によるものではなく、この内容に感銘を受けた後の人が、処世訓とするために記されたものではあるまいかと考えた。そこで思い当たったのは二宮金次郎である。彼は疲弊した農村復興にあたり、領内を巡回して農民に勤倹の生活を教え、出精者を表彰したりした。その際、褒賞として与えたのが鍬や鎌だったのである。これこそ、この文章の意図するところを示す行為と言えよう。

そうは考えて見たが、まだ確証があるわけではない。二宮金次郎とこの文章を結びつけるような資料を見つけたいと街に出て、行き付けの古書店に入った。この店のどこの棚にはどんな分野の本があると、大方は把握しているが、今どき二宮金次郎に関してどんな本があるのかと期待がなかば薄らぎかけた時、平積みの本を選り分けしていて目に入ったのが、『二宮翁金言集』と言う、新書判程度の冊子であった。

急いでページをパラパラとめくると最後に「鍬鎌の文」という一文が載っていた。内容はほぼ軸に書かれていた通りであった。この本は明治四十四年に中央報徳会から初版が発行され、私が手にしたのは大正十四年発行の九版であった。

私の推定を確実なものとしたこの本を、もちろん購うことにした。帳場でこの本を店主に差し出すと、また何か掘り出し物をしたんだなというにこやかな目で迎えてくれた。店を出て歩き始めた私には、肌で感じた古本漁りの醍醐味が何にもまして心地よいものに思えた。



夫鍬鎌は農を経営の重宝、民を
救ひ国を安ずるの元、一日もなくて
叶はず、抑古を考ふるに吾朝神
代のむかし、豊芦原を安国と平げ
給ひしより今日唯今に至るまで
国を富し、家を斉ひ人命を養ふ、
是より尊きはなし、能く力を尽せば
天地の感応目前に顕れ、米麦雑
穀湧出、金銀財宝功徳を照す、故
に食ふも、飲むも、衣も、安楽自在
なり、然らば此重器を用ゆる
事、片時もゆるがせにすべからず、
此功徳によらずして、外に富
貴をねがふべからず

天都日の恵みつみをく
無尽くら
鍬でほり出せ
かまでかりとれ

（おの　かずお　飯野文庫勤務）